

資 料

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

——ヒルデスハイムの事例を中心に——

若曾根 健 治

- 1 はじめに
- 2 フェーデ通告状の端緒・意義・研究また儀礼の問題
- 3 フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉——概要(以上、本号)

1 はじめに

1 フェーデの諸世紀 ドイツ語圏諸地域におけるフェーデ(敵対関係あるいは「および」その実行行為)事例の端初は、中世初期時代⁽¹⁾はしばらく措いて、管見の諸研究によってみるにほぼ中世盛期12世紀60年代および90年代シュタウファー王朝時代⁽²⁾に求めてよいであろう。以降事例に事欠くことはない。フェーデは13世紀⁽³⁾へと続き、14世紀15世紀には頻頻たる勢いをみせ、しかも帝国改造運動をものともせず、マクシミリアン一世帝の「永久ラント平和令」(1495年)前夜⁽⁴⁾にも止むことはなかった⁽⁵⁾。16世紀に入っても後を絶たぬ。しかも20年代には、人口に膾炙する事例としてニュルンベルク、ケルン、ヴォルムスにたいするゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン⁽⁶⁾の、トリーアに向けたフランツ・フォン・ジッキンゲンの⁽⁷⁾、シュヴァーベン同盟にたいするハンス・トーマス・アープスベルクの⁽⁸⁾フェーデが折り重なる。16世紀30年代には、ヴィッテンベルクに火を放ったハンス・コールハーゼ(1540年3月ベルリーンにて刑死)のフェーデ⁽⁹⁾もまた有名である。最後に、ハンス・ディーマル・フォン・リンダッハの

シュヴェーヴィッシェ＝グミュント市にたいするフェーデ⁽¹⁰⁾とともに、時代は16世紀中葉へとなだれこんでいく。

この間14世紀15世紀は上述したとおりフェーデ頻行の時代であり、したがって関係の研究⁽¹¹⁾は枚挙にいとまがない。この場ではただ、最近の研究との意味で15世紀初葉貴族クヴィツォヴ（Quitzw）家が関係した紛争いわゆるベルリーン・フェーデに関するヴァイスマンのモノグラフィ⁽¹²⁾に注目するのと、もう1件、フェーデ研究において内外ともにこれまでほとんど知られていない、スイスはクールを中心とするグラウビュンデン地域をめぐる一連の論文⁽¹³⁾をあげるに止めたい⁽¹⁴⁾。とまれ、フェーデ史は今後とも研究の続けられるべき分野であろう。ただ、特定地域を徹底してとりあげるには文書館における作業がどうしても避けられない。

2 本稿の契機 こうした事情の中でさしあたって刊本の史料によってフェーデのありようを探りうる方途を考えるのに、われわれが〈フェーデ通告状〉（Absagebrief, Fehdebrief, Widersagebrief, letter of defiance, lettera di diffida）と呼ぶ文書史料の分析がある。こうした一群の文書の内容を知ったのは、かつてローテンブルク（オプ・デア・タウバー）市の文書館で〈ウァフェーデ（報復放棄）誓約証書〉の探索にあたっていたおり当時の館長から偶然フェーデ通告状原本の束⁽¹⁵⁾を示されたことにありこれが最初のきっかけとなっている。通告状がもつ意義などについては後述するが、当面本稿の契機になった事情と、本稿の目的とを述べておきたい。

以前筆者は少人数の会合の場で「フェーデ通告状から見えるもの——紛争と平和形成——」と題し報告をおこなった⁽¹⁶⁾。報告の論旨は、通告状を〈平和形成〉の観点から読むことができぬであろうかというおもいにあった。これは、旧稿において、ローテンブルク市に宛てたヴェルツブルクやバンベルクの司教、司教ゆかりの者、またブルクグラフ・フォン・ニュルンベルクらによる通告状をてがかりに論じたもの⁽¹⁷⁾の延長上にある問題である。その後ニュルンベルク⁽¹⁸⁾やフランクフルト（マイン）⁽¹⁹⁾についても通告状を利用し考察をおこなった⁽²⁰⁾が、上記報告では、もっと他のラント・都市に知られる通告状を視野にとりこんで考

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

えようとしたのである。このときとりあげた通告状文書(刊本)には、ブレーメン⁽²¹⁾やヘルフォルト⁽²²⁾、またマルク・ブランデンブルク⁽²³⁾、マクデブルク⁽²⁴⁾さらにゲッティンゲン⁽²⁵⁾、バーゼル⁽²⁶⁾などに関するものや、他にはヒルデスハイム関係の文書があった。いずれも、刊本の都市文書集の中に散見されるものであった⁽²⁷⁾。

こうしてヒルデスハイム関係のフェーデ通告状テキストを引いたが⁽²⁸⁾、じつは、その中に、厳密には通告状とはいえぬ文書が含まれていた⁽²⁹⁾ことに、後日気づいた。当初混同していたことから判るように、それはもちろん、通告状と無関係の文書ではない。およそフェーデ通告に関係する文書には、通告者リスト⁽³⁰⁾を筆頭にさまざまなものがあるが、当該の文書もこれに該当し、しかもこの最有力な1つであることに間違いはない。それが、本稿表題にみえる〈名誉保持告知状〉(この言葉は、筆者による造語)である。厳密にはフェーデ通告状とはいえぬ当該文書の存在を『ヒルデスハイム市文書集』であたってみるに、意外にも数は少なくない。むしろ、フェーデ通告状よりも多いことが判ってきた。これ自体、なんらかの意味があるようにおもわれるが。

3 本稿の目的 このようにして当該文書を取りあげ、フェーデ通告状とともに考察する必要が出てきた。しかも、このことが、通告状を〈平和形成〉の観点から読んでみる、との問題関心と無関係ではないと考える。ただ本稿では、こうした考察に向かう以前の段階として、関係文書すなわちフェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉の文書そのものの分析をおこない(これまで、筆者は通告状についてすら充分これを果たしてこなかった)、その結果を「資料」として残したい。もちろん〈名誉保持告知状〉はヒルデスハイムにのみ知られるわけではない。ここではただ一例として、同時代(1388年頃)ティッモ・ボック(Tymmo Bok)なる者がゴスラル市参事に宛てた〈告知状〉、および後代(1465年9月16日)ハルバーシュタット市がブラウンシュヴァイク＝リューネブルク大公ヴィルヘルムに向け発した〈告知状〉をあげておこう。というわけは、ティッモ、ハルバーシュタット市のいずれも、そのとき同時にフェーデ通告状をも発行していてこの点興味深いからである。ティッモは同じくゴスラル市にたいし⁽³¹⁾、またハルバーシュ

タット市は大公フリードリヒ（若）に向けて^(31a) 通告状を発していた。

とはいえ、当面はヒルデスハイム市について、しかもさしあたり14世紀末期あたりの事例を中心にみていこう。この時期にフェーデ通告状を含め〈名誉保持告知状〉を比較的多くみつけることができるからである。なお当市では15世紀80年代においても市参事会が司教バルトルト（Bertolt）にフェーデ通告状を発する⁽³²⁾ など紛争が起きていた。

ここでひとこと述べれば、およそフェーデ通告の当事者はじつに多様であった。当事者には発し手と受け手とがいたが、いずれの側にも、国王は別として（国王は発し手となった例はある）^(32a)、さまざまな身分が関係した。選帝侯から諸侯・聖俗貴族（修道院も含む）に到り、また騎士、騎士見習いあるいは従者（*edelknechte*）にわたり、都市・市民さらに都市同盟、そして農民⁽³³⁾ におよんだ。興味ある一例として、都市の傭兵（*dienârn*）が選帝侯に通告状を送達することがあった^(33a)。この場では煩雑になるので、これ以上個別には紹介せぬが、ともあれ、都市が都市に向け、貴族が貴族に宛て、封臣が封主に通告状を発する、といったこうした状況の中で、周域の諸侯・貴族・騎士らが都市に向ける事例が数として最も多いといえる。本稿がヒルデスハイムに関し述べるものも、主としてこれに属する。

本節の最後に、〈名誉保持告知状〉なる文書一般の存在にはっきりと気づかせてくれた、テーヴェスの論文「ヴェーザー河とエルベ河間におけるフェーデ制度——フェーデ・和解・ウァフェーデ」⁽³⁴⁾ に、感謝の念を表するものである。

2 フェーデ通告状の端緒・意義・研究また儀礼の問題

4 端緒 既述のように、12世紀後期にフェーデ事例の端初があった。まさに同じ時代にすでにフェーデ通告について言及がみられる。フリードリヒ一世帝のいわゆる「放火犯にたいする平和令」（1186年）の一箇条においてである。フェーデ（敵対関係）の実行——言い換えれば、加害（*damnum*）の行為——には、事前に（すなわち少なくとも3日前に）使者によってこれを通告すべく（*diffiduciet*）

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

定められた⁽³⁵⁾。とりわけ注目するのは、通告の立証の点である。通告がなされぬまま加害に遭遇したとの訴えが提出されるときは、通告の使者は、使者の主君から指示を受けた時と場所とにおいて通告を果たした旨を宣誓し、これによって無責を立証する。使者がすでに死去しているときは、主君が2人の宣誓補助者と共に(自分共3人によって)同旨の宣誓をおこなわねばならぬ。ただ、上記箇条には、〈通告状〉といった書状については、痕跡はみられない。ここではまだ〈口頭による通告〉が念頭におかれていたのであろうか。

事前通告の趣旨は、フリードリヒ二世の「マインツ帝国平和令」(1235年)⁽³⁶⁾やカール四世帝の『金印勅書』(1356年)に引き継がれる⁽³⁷⁾。マインツ平和令や金印勅書にはフェーデにおける加害の行為として具体的に「放火 (incendia)」や他に「質に取る (pignoret)」とか「略取・略奪 (spolia vel rapinas)」があたり、勅書にはさらに「不法のフェーデ (guerras et lites iniustas)」・「不正な放火、略取・略奪 (iniusta incendia, spolia et rapinas)」といった言葉がみえる。

とまれ、これらの法から、フェーデの通告問題がすでにフェーデ史の早い段階で帝国法にのぼり、後代に引き継がれていたことが判る。とともに、正規の(最小限3日前における)通告のない〈不法・不正の (iniusta) 加害〉の行為が事実上起きていたこともまた、推測しうるのである。

他方で、16世紀には、通告状を送るということがすでに違法として断罪の対象になったことが、ブランデンブルク市審判人の裁判事例(1566年)にみえている⁽³⁸⁾。

5 通告状の意義 通告状送達、はひらく〈フェーデ現象〉における一画期となっている。通告状発行以前の段階ですでに当事者間に争いが生じ、またこれをめぐって交渉や折衝が起きていた。あるいは、一方が相手を告訴し、しかし決着がつかぬ(判決が下りぬ)とか、決着がついても(判決が下りても)これに従わぬ(〈裁判拒絶〉)とかが生じていた。通告状による通告以後フェーデの実行となるが、実行に到らぬこともあるし、発行された通告状が相手に届かぬこともある。通告状を発行せぬままフェーデの実行におよぶこともある。いずれにせよ、当時の文書には、〈告訴が事前に提起されぬまま、また通告がないまま (vnentsagt

vnd vnbewart)〉フェーデが実行された、との苦情がよせられているのを目にする。とくにこの〈vnentsagt vnd vnbewart (通告がないまま)〉(1499年)⁽³⁹⁾の言葉は〈フェーデ実行には正規の通告を要する〉との考え方、もしくは慣行が長きにわたって人々の念頭にあり続けていたことをおもわせる。

ともあれ、通行状の発行とフェーデの実行の後には、契約や仲裁によって〈休戦〉あるいは〈和解〉のはこびとなるが⁽⁴⁰⁾、このとおりにならぬときは、フェーデが続行・再燃する——こうした全体が〈フェーデ現象〉を意味する。こうしてみてくるとき、通告状についても〈フェーデ現象〉全体と関連づけ考察していかねばならぬことになるう。

しかも、通告状は〈フェーデ現象〉の〈法的〉側面を如^{にょじつ}実に示すものである。もちろん〈法的〉側面を示すものは、通告状にかぎられない。〈告訴〉・〈裁判拒絶〉また〈休戦〉・〈和解〉の契約・〈仲裁〉もそれに属する。しかし、通告状は〈法的〉側面を著しく帯びることは否めない。他方、通告状は〈法〉の問題であるとともに〈実践〉の問題ともからむ。これはいかなることを指すのか。それは、通告(diffidationes, deffiammentum, widersaget)の行為こそが〈フェーデの行為〉と〈非フェーデの行為〉とを別^わける、ということにある。これを多少敷衍していえば、通告は〈フェーデ〉を〈血讐〉(これは〈ジッペフェーデ〉とか〈殺害フェーデ〉)と言い換えられることもある)から区別するものに他ならぬ、また、フェーデを単なる攻撃から別^わける、あるいは、一般の騎士の行動を、いわゆる〈盗賊騎士〉のそれから分かつものである。ではなぜ、このことをとくに指摘せねばならぬのか。それは、端的にいて、〈フェーデの行為〉による結果と、〈非フェーデの行為〉によるそれとが、ほとんど相違のないものであることによっている。

このところは、おそらく読者諸氏にはすでに容易に想像のつくところであろうが、あまり先走ることはせず後節におけるフェーデ通告状および〈名誉保持告知状〉の分析を待ちたい。ただ、ひとこといえば、〈フェーデとクリミナリテート(犯罪現象)〉の問題⁽⁴¹⁾に繋がっているということである。

6 通告状をめぐる研究 この場はフェーデ通告や通告状をめぐる研究状況に立ち入るところではないが、多少ふれておきたい。フェーデ通告状をまさに論文

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

表題にすえ考察をおこなったものに、レーゼナーの論文⁽⁴²⁾がある。彼は、フォン・クロッケの論文が掲げる、ヴェストファーレンの貴族フルステンベルクに宛てた通告状⁽⁴³⁾、またオルトの著書が紹介する、フランクフルト（マイン）に向けた通告状⁽⁴⁴⁾を一例にとりあげ「コミュニケーション」の視点から考察をおこなおうとした。ただ、たしかに「コミュニケーション」の言葉は使うが、この視点に、立ち入った考察は加えていない。例えば「相手を攻撃する、束縛する、支配する」のも「コミュニケーション」形態の1つとみられる⁽⁴⁵⁾が、フェーデ通告はこれに該当するのであろうか。なお、ドルトムント・フェーデ（1388-89）に関するガルニールの論文⁽⁴⁶⁾も、この「コミュニケーション」問題の関連でフェーデの通告を考察しようとしている。

とにかく、通告・通告状への言及は、およそフェーデをめぐる諸研究の中で、例えば、ブルンナー（1939）⁽⁴⁷⁾やアスムス（1951）⁽⁴⁸⁾をはじめ、ニュルンベルク・フェーデに関するフォークルの⁽⁴⁹⁾、またバイエルンにおける農民フェーデをめぐるラインレの著書⁽⁵⁰⁾に到る諸研究の中で多かれ少なかれ当然とりあげられてきたし⁽⁵¹⁾、わがくには山内進がほとんど初めてこれに正面から立ち向かった。彼によれば、通告状は、だれが敵であるのかをはっきりさせる（「だれに対して敵対関係が生じるかを明らかに」する）⁽⁵²⁾ところにその意義があった。ただ他方で、通告の相手方はなにゆえに通告を受けるのかは通告「以前の交渉などで充分知っていたはず」であるとされる⁽⁵³⁾。通告状をいずれ受け取るかも知れぬ、のは先刻承知のこと、織りこみ済みのことであったということだ。とすると、通告状は、当事者の立ち到った敵対の関係をむしろ〈周囲に明らかにする〉ところ⁽⁵⁴⁾に重い意味があったことになるであろう。

7 儀礼と象徴の問題 フェーデ通告状は、周知のとおり多くは短文からなり⁽⁵⁵⁾、かつ型にはまった常套語・慣用句で書きあらわされている。しかも、ほぼ同様の文言を伴って、とくに14世紀60年代から15世紀80年代にかけ広い地域で発せられた。北はレファール（Reval [現在エストニアのタリン]）⁽⁵⁶⁾やフリーゼン⁽⁵⁷⁾、西はメッツ⁽⁵⁸⁾またミュールハウゼン（エルザス）⁽⁵⁹⁾、南はバルン、フリブール⁽⁶⁰⁾、東はザルツブルク⁽⁶¹⁾、ウィーン⁽⁶²⁾におよぶ。ともかく、通告状をめぐる、

たったこれだけのことからすでにいろいろな質問が出る。通告状の多くが、なぜ短文であるのか。紛争は当事者間で先刻承知の事態であったから書状はクドクドと長文たる必要はなかった、ということもたしかにあるだろうが、他に理由はないのであろうか。また、なぜ常套語が使われているのか。特定の様式を保った通告状が広がっていくのには、どのような事情が働いていたのか。さらに、そもそも常套語が「事実とは大きなへだたりのある」⁽⁶³⁾ ものなのであれば、フェード通告状の場合常套語・慣用句の裡にはどんな〈事実〉が隠されているのか、と。ただこの場では、単に質問を提起するだけに止めておきたい。

最後に、常套語・慣用句が使われるということは、或る意味で〈儀礼〉の問題に繋がってくるのではないか。この点について、少し説明を加えよう。儀礼は、慣用の〈発言・表現〉の中にあらわれている。とともに、なにかをおこなう〈行為〉としてもあらわれる。われわれの場合でいえば、フェードの通告はもともと、使者をとおし、相手（被通告者）側に向け、証人の前で、慣用の言葉を用い口頭によって実行されたものとみられる。もしかしたら、そのさい或る〈身振り〉が伴っていたかも知れない。また口頭によることばは、短いものとならざるをえなかったろう。時代の経過とともに、常套語・慣用句を用いて書状が作られる。これが相手側に手渡され、あるいは伝えられる。口頭通告が、書面通告に替わる。書面に盛られた文言は、口頭によることばがそのまま用いられたものかも知れぬし、口頭の文句が整えられ記載に上ったものかも知れない。ともあれ、こうして慣用の〈ことば〉と繰り返される〈行為〉とからなる、フェード通告の儀礼は、コミュニケーション（これは〈日常的あいさつ〉と〈儀式的あいさつ〉と言い換えてもよい）のうち〈儀式的あいさつ〉の1つの方法となっていく。青木保の言葉を借りていえば、儀礼は「それがいかなる「現実」を意味し、どのような性質の「コミュニケーション」を成立させるのか」⁽⁶⁴⁾ という問題を発生させるが、フェードの通告もまた、同様の問題にぶつかるのである。

なお付け加えるに、フェード通告状をめぐる近時の研究は上述で一部ふれたように「コミュニケーション」や象徴の方面に注意を向ける。これは歴史上における〈文書化〉の問題に繋がっている。13世紀までは、例えば〈託身の儀式〉・〈和

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

平の接吻) また〈贖罪の装束〉・〈裸足による巡行〉といった〈身振り〉が「象徴的コミュニケーション」諸形態の中心的地位にあった。これにたいし、中世後期になるとますます〈文書〉が象徴としての地位を獲得する、と⁽⁶⁵⁾。フェーデ〈通告状〉がその一例となる、というように⁽⁶⁶⁾。

3 フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉——概要

6 フェーデ通告状とその骨格 次節以降において文書の細かな分析・検討をおこなうが、その前に、本節では、フェーデ通告状および〈名誉保持通告状〉の骨格がどのようなになっているのかについて、いちおうの知識をえるため文章のできるかぎり短文のものを選んで、関係文書全体のしくみを示しておきたい。先ずフェーデ通告状である。

通告状は、ヒルデスハイム15世紀50年代60年代の文書によれば〈veydebreve〉(また〈feydebreff〉・〈veidebref〉)と呼ばれている⁽⁶⁷⁾が、ここでは、14世紀末葉頃の文書の一例を示そう。原文は、こうである(全文)——

[1] „Wettet, radesmestere unde rad unde gemenen borgere to Hildensem, [i] dat ek Vorlop wil juwe figent sin [ii] umme Ludolves willen von Walmeden [iii] unde wil des myn ere an juk wol verward hebben. [iv] Screven under Hanses ingesegele von Hardenberge, des ek to dusser tiit bruke.“⁽⁶⁸⁾

これほど短い文章の、それでいて要をえた通告状は、およそ全通告状の中で他にみいだされぬくらいである。余分の文言をほとんど割り落とした体裁となっているとの意味で。文章中末尾の „[iv] Screven under Hanses ingesegele von Hardenberge, des ek to dusser tiit bruke“ は、文書における印章押捺の件を語るくだり(〈本通告状には、ハンス・フォン・ハルデンベルクの印章を用いた。余フォルロープはこのとき自己の印章を持たなかったから。〉)であり、通告状にかぎられず、印章の件では文書にはよくみられるもの。ただ、ここでは、ハンスとフォルロープとの関係は不詳。わりによくある例は、臣下が主君の印章でもって用をたす場合である。

ともかく、印章の件を除けば、削り落とされなかった文言はといえば „[ii] umme Ludolwes willen von Walmeden“ のみである。これは〈余が通告状を発するのは、ルードルフ・フォン・ヴァルモーデンの件のゆえである〉と述べている。この意味をめぐっては、すぐ後に記すであろう。ちなみに、„umme … willen …“ の定式は、通告状の場合、発行の事由が述べられるさいに用いられる常套の書式の1つである。

以上を要するに、冒頭〈貴殿ヒルデスハイムの市長および参事会また全市民は、知られたし（知るべし）。〉としてヒルデスハイム市に宛てた本通告状の骨格は、原文によって示せば、こうなる。„[i] dat ek Vorlop wil juwe figent sin (中略) [iii] unde wil des myn ere an juk wol verward hebben.“ こうして、通告状の骨格は (i) 〈余は、貴殿の敵となるなり。〉および (iii) 〈余はこれによって、貴殿にたいし余の名誉を保持した、と言うものなり。〉と述べられたところにある。

〈貴殿〉とは、ヒルデスハイムの市長・参事会・全市民を指し、通告状の受け手である。〈余〉とはフォルロープなる名の者であり、通告状の発し手であった。ここにいう〈余の名誉を保持した〉とは具体的になんのことなのかは、次節におけるフェーデ通告状文書の分析によって明らかになるであろう。

ともあれ、上記の〈余が通告状を発するのは、ルードルフ・フォン・ヴァルモーデンの件のゆえである〉に戻って、これはなにを意味するのであろうか。ルードルフとはなんびとであり、フォルロープといかなる関係にあるのか。また彼の件とはなんであろうか。そこで考えるに、もし (a) ルードルフがフォルロープの仲間（なかんずく、フォルロープの支援者・助力者）であるときは、その意味はこうだろう。〈貴殿ヒルデスハイム市から不法のあつかいを受けたルードルフは通告状を貴殿市に発したので、余フォルロープはその不法なあつかいの件で彼のために同じく通告状を発するものなり〉と。もし逆に (b) ルードルフがヒルデスハイム市と利害関係をともにする者（なかんずく、同市の市民）であるときは、意味は次のようになる。〈ルードルフは余フォルロープに不法を働いたゆえ、余は、彼が市民として所属する貴殿ヒルデスハイム市にたいし、その不法の件でフェーデを通告するものなり〉と。ここでは、さしあたって例として「不法」というこ

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

とをあげたが、この点は後節でとりあげるであろう。

この場では、これら2つの可能性を指摘するだけに止めておきたい。いずれにせよ、フェーデ通告状においては、以上からわかるように、通告状の発し手自身が、その受け手と〈敵 (figent)〉の関係に入る。

以上、本書状の全体を通して発行者が語るのは、こうである。〈われはヒルデスハイム市と敵となるが、これによともわが名誉は保持されることをヒルデスハイム市長・参事会・市民のすべてに伝えるものなり〉と。

7 〈名誉保持告知状〉とその骨格 次に〈名誉保持告知状〉の骨格をみてみたい。〈名誉保持告知状〉とは前述のとおり筆者当面の創作語であるが、原語では、〈veidebref, ontseydbrief (フェーデ通告状)〉といった言葉に匹敵する明晰な用語は、一般に知られない。例えばザクセンの他の都市では、ブラウンシュヴァイク市参事会がハルバーシュタット司教・都市や、またクヴェトリンブルク市やにフェーデ通告をおこなった(1366年)一例があるが、このときの書状は „de breve der bewaringhe“ と呼ばれた⁽⁶⁹⁾。ただこれを読むに、われわれの〈フェーデ通告状〉と内容上なんら変わらない。ヒルデスハイムの後代に出現する言葉によって示せば〈vorwaringen〉⁽⁷⁰⁾が〈告知状〉にあたるか。しかしこれとて単にフェーデを示すことがある。1439年ヴェルニゲローデ市がハルバーシュタット市に送った通告状には、〈myt gick unde den juwen in aller vorwaringe unde veyde willet sitten (貴殿および貴殿ゆかりの者と、敵の關係に、立たん)〉⁽⁷¹⁾とある。ここにみる〈vorwaringe unde veyde〉は、いわば〈二語一想〉を示し全体として〈フェーデ〉と称しても差し支えない。とまれ、〈告知状〉の一例(全文)を次にあげよう。

[1] „Min denst tovern. Den wisen luden, an den rat to Hildensum. Wetet, dat my is to wetende gheworden, [i] dat juwe borghere myner viende güt vruchtighen unde buwen. [ii] Were dat ek den jeneghen scaden dede, [iii] des wolde ek myne ere an ju vorwaret hebben. [iv] Sub sigillo Borchardi de Luttere. / Hermen Vrese format hoc.“⁽⁷²⁾

総じて〈名誉保持告知状〉は、フェーデ通告状よりは長文のことが多い。この点からいえば、稀にみる短文である。ヘルマン・フレーゼが謙^{へりくだ}った恭順なる態度

でもってヒルデスハイム市参事に宛てた本〈告知状〉の骨格は、こうなる。

〈[i] dat juwe borghere myner viende güt vruchtighen unde buwen. [ii] Were dat ek den jeneghen scaden dede, [iii] des wolde ek myne ere an ju vorwaret hebben.〉

ここにみえるのは次の3点である。(a)〈貴殿ヒルデスハイム市の市民は、余ヘルマンの敵の土地を使用・耕作し、収益をあげている [i]。〉なお〈敵 (viende)〉がだれなのかは記されていない。ただ、市参事会にとっては先刻承知のことであつたろう。(b)〈余ヘルマンは、余の敵たる何某^{なにかし}の所有する土地を攻撃するさい、当該市民にも加害におよぶことがある [ii]。〉(c)〈ただしそのこと〔加害〕について、余は貴殿にたいし余の名誉を保持した、と言うものなり [iii]。〉ここにみえる〈余の名誉を保持した〉とはどのようなことなのか、後節における〈名誉保持告知状〉の分析によって明らかになるであろう。「土地を攻撃する」として示した(上述)「攻撃」の具体的中味も、同様である。

このところで、フェーデ通告状 [1] における (iii)〈余はこれによって、貴殿にたいし余の名誉を保持した、と言うものなり〉をみるに、これは、通告者が〈敵〉にたいしおこなった、フェーデ実行による攻撃もしくは〈加害 (scaden)〉に関わる文言であつたことが判る。しかもここで注目するのは、攻撃・加害は〈敵〉の身体のみならず所有物(例えば〈土地〉)にもおよぶことがあつたであろうことである。こうした攻撃・加害が具体的にどのようなものであつたのかは、後節における分析で解明したい。最後に、印章については、上記フェーデ通告状 [1] と同様の事情にあり、〈告知状〉の発行者ヘルマンは自己の印章に代わってブルカルドなる者の印章を用いている。両者の関係は不詳である。

以上、本書状の全体をともし発行者が語るのは、次のとおりである。〈市民が用益に従事している土地はわが敵の土地であり、わが敵を攻撃するさい市民に害がおよぼうともわが名誉は保持されることを、ヒルデスハイム市参事に伝えるものなり〉と。

8 フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉の相違と関わり このように、フェーデ通告状 [1] と〈名誉保持告知状〉 [1] をならべみてきた。両者は、形式上、内容上一部分重なりあつていたことが判る。では、両者はどう異なり、どう関わ

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

るのか。(イ) 両文書の違いとしてすぐ気づくのは、通告状においては、発し手(通告者)と受け手(被告者)とは本書状によって〈敵〉の関係に入りこむ。他方、〈告知状〉では、発し手(告知者)と受け手(被告者)とは〈敵〉の関係には立っていなかったし、当書状によって両者が新たに〈敵〉の関係に入る、ということもない。(ロ) この点をもう少し具体的に語れば、こうである。通告状 [1] の〈名誉保持〉通告文は〈名誉保持告知状〉 [1] にみる〈名誉保持〉告知文と内容上形式上ほぼ同じものである。両者とも文字どおり常套語・慣用句であり、このところに、通告状と〈告知状〉との関わりがみられる。ただし、後者の告知文の受け手(ヒルデスハイム市)は、〈告知状〉でみるに、告知者とはがらんらい〈敵〉の関係に立ってはいなかったし、〈告知状〉の発行によって新たにその関係に入るということもない。通告状における〈名誉保持〉通告文の受け手(ヒルデスハイム市)が、通告者と、通告状発行によって〈敵〉の関係に入るのとは、その点で事情が異なっていた。

(ハ) そこで、質問が提出される。では、なぜフェーデ通告状の他に、〈名誉保持告知状〉のような文書が発行されるのであろうか。あるいは、必要とされるのであろうか。また、それぞれの文書を受け取るはずのヒルデスハイム市(市長・参事会・市民)はそれぞれにどう対応するのか、あるいはどのような対応が予想されるのであろうか。こうした質問を頭におきつつ、後節にすすみたい。

9 作業手順 以下では、フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉のそれぞれについてさらに分析の歩をすすめたい。その場合、以上で述べてきたように、先ずは、個々の文書の骨格を [i] [ii] [iii] [iv] で示し、次いで、骨格提示のさいに(中略)としたところを含め骨格部分を読んでいきたい。

読者諸氏の中には、そのような回り遠いことは避け、原文を添えあっさり日本語訳すればよいのでは、とみる向きもあろう。むろん、それはそれで正しい。ただ、筆者としては、当該文書の書き手がなにを考えていたのか、また文書の背景にあって当時の人々がどんな通念を抱いていたのか、についていろいろ考えをめぐらしつつ確かめたいとおもうのである。しかも、中世低地ドイツ語文に不慣れた筆者にとって、そうした方法は都合がよく、それなりの意味をもつのではない

か、と考える。

(続く)



チューリヒ、ルツツェルン、シュヴィーツ、
グラールスからの使者がザンクト・ガレン市
にフエーデ通告状を送達する (8.2.1490)

(Die Schweizer Bilderchronik des Luzerners
Diebold Schilling 1513, hg. v. Schmid, Alfred
A., Luzern 1981, S. 238より。)

注

- (1) この時代について例えば以下の研究を参照。Levy, Albert, Beiträge zum Kriegerrecht im Mittelalter insbesondere in den Kämpfen, an welchen Deutschland beteiligt war (8., 9., 10. Jahrhundert. —Anfang des 11. Jahrhunderts), Breslau 1889 ; Halban-Blumenstock, Alfred, Königsschutz und Fehde, in : ZRG G. A. 17, 1896, 63-76; Finckenstein, Albrecht Graf, Pax dei, Fehde und Widerstandsrecht. Zum Verhältnis von innerem und äußerem Frieden im 10. und 11. Jahrhundert, in : Frieden in Geschichte und Gegenwart, hg. v. Historischen Seminar der Universität Düsseldorf, Schwann 1985, 35-45; Patschovsky, Alexander, Fehde im Recht. Eine Problemskizze, in : Roll, Christine (Hg.), Recht und Reich im Zeitalter der Reformation. Festschrift Horst Rabe, Frankfurt (M) u. a. 1996, 145-178. なお一般に Boockmann, A., Fehde, Fehdewesen, in : Lexikon des Mittelalters 4, 1989, Sp. 331-334.
- (2) Dürig, Walter, Die bogen-bayerische Fehde des Jahres 1192 im Lichte eines zeitgenössischen liturgischen Gebetes, in : Historisches Jahrbuch 75, 1956, 167-

フエーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

- 172; Schiffer, Peter, Möhringen und die Territorialpolitik der Pfalzgrafen von Tübingen. Zur Ursache der Tübinger Fehde (1164-1166), in : Aus südwestdeutscher Geschichte. Festschrift Hans-Martin Maurer ; dem Archivar und Historiker zum 65. Geburtstag, hg. v. Schmierer, Wolfgang u. a., Stuttgart 1994, 81-104.
- (3) この時代について研究は多くないが例えば Mone, Franz Joseph, Briefe über die Fehden am Oberrhein zwischen 1234 und 1249, in : Zeitschrift für die Geschichte des Oberrheins, 3, 1852, 59-66 がある。
- (4) Cf.Bechstein, Eberhard, Die Tierberger Fehde zwischen den Grafen von Hohenlohe und den Herren von Stetten (1475 bis1495). Ein Streit zwischen Rittern, Grafen, Fürsten und dem Kaiser am Vorabend der Reichsreform, Köln/Weimar/Wien 2004. 本書の一部については、後掲拙稿 [17] 76頁 (注164) を参照。
- (5) 丁度この過渡期16世紀冒頭時代の一フエーデ事例をとりあげ本稿にも関係する研究に Zmora, Hilla, Adelige Ehre und ritterliche Fehde : Franken im Spätmittelalter, in : Verletzte Ehre. Ehrkonflikte in Gesellschaften des Mittelalters und der Frühen Neuzeit, hg. v. Schreiner, Klaus/Schwerhoff, Gerd, Köln/Weimar/Wien 1995, 92-109 がある。なお、ここには〈フエーデと決闘〉の問題が論じられているのが、興味深い。
- (6) Press, Volker, Götz von Berlichingen (ca.1480-1562) —vom „Raubritter“ zum Reichsritter, in : Zeitschrift f. Württembergische Landesgeschichte 40, 1981, 305-326; Göttmann, Frank, Götz von Berlichingen—überlebter Strauchritter oder moderner Raubunternehmer ?, in : Jahrbuch für Fränkische Landesforschung 46, 1986, 83-98. なお、後掲拙稿 [38] 75頁 (注120) 参照。
- (7) Rendenbach, Karl Hans, Die Fehde Franz von Sickingens gegen Trier, Berlin 1933 (Ndr.1965).
- (8) Ritzmann, Peter, „Plackerey in teuschen Landen“ : Untersuchungen zur Fehdetätigkeit des fränkischen Adels im frühen 16. Jahrhundert und ihrer

- Bekämpfung durch den Schwäbischen Bund und die Reichsstadt Nürnberg, insbesondere am Beispiel des Hans Thomas von Absberg und seiner Auseinandersetzung mit den Grafen von Oettingen (1520-31), München 1995 ; Pfeiffer, Gerhard : Hans Thomas von Absberg, in : Fränkische Lebensbilder 13, 1990, 17-32.
- (9) Kaufmann, Ekkhard, Michael Kohlhaas = Hans Kohlhasse. Fehde und Recht im 16. Jahrhundert—ein Forschungsprogramm, in : Recht, Gericht, Genossenschaft und Policey. Studien zu Grundbegriffen der germanischen Rechtshistorie, Symposium für Adalbert Erler, hg. v. Dilcher, Gerhard/Diestelkamp, Bernhard, Berlin 1986, 65-83 ; Müller-Tragin, Christoph, Die Fehde des Hans Kohlhasse. Fehderecht und Fehdepraxis zu Beginn der frühen Neuzeit in den Kurfürstentümern Sachsen und Brandenburg, Zürich 1997.
- (10) Graf, Klaus, Die Fehde Hans Diemars von Lindach gegen die Reichsstadt Schwäbisch Gmünd (1543-1554). Ein Beitrag zur Geschichte der Städtefeindschaft, in : Andermann, Kurt (Hg.), » Raubritter « oder » Rechtschaffene vom Adel « ? Aspekte von Politik, Friede und Recht im späten Mittelalter, Sigmaringen 1997, 167-189.
- (11) この時代全体をとりあげた文化史家フライタークの作品を参照。Freytag, Gustav, Krieg und Fehde im 14. und 15. Jahrhundert, in : Bilder aus der deutschen Vergangenheit, 2. Bd., 1. Abt., Vom Mittelalter zur Neuzeit (1200-1500) (Gesammelte Werke 18), Leipzig 1888, 277-315 (ders., Bilder aus der deutschen Vergangenheit, Bd. 1 Hoch-und Spätmittelalter, hg. v. Pleticha, Heinrich, München 1987, 313-344).
- (12) Weissmann, Stefanie-Friederike, Raubritter in der Mark ? Fehderecht und Fehdepraxis am Beispiel der Berlin-Fehde Johanns und Dietrichs von Quitzow, in : Blätter für deutsche Landesgeschichte, 145/146. Jg., 2009/2010, 281-369.
- (13) Hoppeler, Robert, Die rätisch-lombardische Fehde 1219/1220, in : Bündner Monatsblatt. Zeitschrift für bündnerische Geschichte, Landes-und Volkskunde

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

- [=BM] Jg. 1918 nr. 4, 112-116 ; Mooser, Ant., Das Frauentor (Porclas) und die Werdenbergisch-Belmontsche Fehde von 1352, in : BM Jg. 1928 nr. 2, 33-51; Conrad, Giachen, Von der Fehde Chur-Como und den Friedensschlüssen zwischen den Schamsern und Cläffnern in den Jahren 1219 und 1428, in : BM Jg. 1955 nr. 1, 1-21, nr. 2/3, 43-59, nr. 4, 126-150; Joos, L., Die Belmont'sche Fehde, d. h. der Überfall des Grafen Albrecht II. von Werdenberg-Heiligenberg auf die Gruob und das Lugnez vom 12. Mai 1352, in : BM Jg. 1958 nr. 1/2, 1-15; Bundi, Martin, Zum Fehdewesen in Rätien im 13. und 14. Jahrhundert, in : BM Jg. 1969 nr. 9/10, 241-283.
- (14) フェーデ研究一覧の1つに Reinle, Christine, Bauernfehden. Studien zur Fehdeführung Nichtadliger im spätmittelalterlichen römisch-deutschen Reich, besonders in den bayerischen Herzogtümern, Wiesbaden 2003, 545-579を参照。
- (15) これが Stadtarchiv Rothenburg B 10 と呼ばれた、文書の綴りの中に収められたもの。その1つ (1407年7月18日ローテンブルク市にあてた通告状)は、次の図書に写真版として転載されている。Justiz in alter Zeit. Band VI der Schriftenreihe des mittelalterlichen Kriminalmuseums Rothenburg ob der Tauber 1984, p. 155, Fehdebrief (1407) : Stadtarchiv Rothenburg B 10 fol. 71.
- (16) 2011年1月22日法制史学会中部部会における報告 (名城大学)。
- (17) 拙稿「平和形成としての紛争——フェーデ通告状の考察から——」『熊本法学』113 (2008) 1～97頁。
- (18) 拙稿「フェーデ通告からラント平和裁判へ——フランケンのある事例より——」熊本大学法学部創立30周年記念『法と政策をめぐる現代の変容』(成文堂・2010) 313～340頁。
- (19) 拙稿「フェーデ通告と通告状の一考察——都市戦争時代のフランクフルトについて——」『熊本法学』127 (2013) 1～69頁。
- (20) 他に、拙稿「都市とラント平和裁判——14世紀後期の事例から——」『熊本法学』119 (2010) 18頁以下は「ラント平和裁判所にたいするフェーデ通告」の事例にふれている。

- (21) Bremisches Urkundenbuch, hg. v. Ehmck, D. R. /Bippen, W. v., Bd. 4 (Bremen 1886), Nrr. 240 (1399), 325 (1404) ; Bd. 5 (Bremen1905), Nrr. 3 (1411), 36 (1413), 95 (1417), 115 (1418), 132 (1419), 136 ([1419]), 147 (1420), 149 (1420), 281 (1426), 291 (1426), 305 (1426), 314 (1427), 325 (1428), 369 (1428), 370 (1428), 389 (1429), 405 (1429), 432 (1430), 435 (1430), 436 ([1430]), 437 ([1430]), 463 (1431), 464 (1431).
- (22) Urkundenbuch der Stadt Herford, 1 (1224-1450), bearb. v. Pape, Rainer/Sandow, Erich, Herford 1968, Nrr. 73 (1369), 113 ([c.1390]), 119 (1391), 124 (1393), 140 ([1. Hälfte 15. Jh.]), 204 (1432), 211 (1433), 214 ([1434?]), 224 (1435), 247 (1437), 249 (1437), 251 (1438), 252 (1438), 279 (1442), 285 (1443), 293, 294, 295(1443), 325 (1448), 327(1448). これらのうち Nr.293 (1443) は Terharn, Christoph, Die Herforder Fehden im späten Mittelalter, Berlin 1994, 45 f. (Anm.194) にも収められている。
- (23) Codex diplomaticus Brandenburgensis. Sammlung der Urkunden, Chroniken und sonstigen Quellenschriften für die Geschichte der Mark Brandenburg und ihrer Regesten, hg. v. Riedel, Adolph Friedrich, 2. Haupttheil, Bd. 4 (Berlin 1847), Nr. 1481 (1415?) ; Supplementband(Berlin 1865), Nrr.67(1451), 68, 69, 70 (1451).
- (24) Urkundenbuch der Stadt Magdeburg, 2 (1403-1464), bearb. v. Hertel, Gustav, Halle 1894, Nrr. 268 (1432), 269 (1432), 590 (c.1450), 826 (1450).
- (25) Urkundenbuch der Stadt Göttingen, hg. v. Schmidt, Gustav, Bd. 1 (Hannover 1863), Nrr. 322 (1387), 323, 324, 324a, 325(1387).
- (26) Urkundenbuch der Stadt Basel, Bd. 6 (1409-1440), bearb. v. Huber, August (Basel 1902), Nrr. 14-1 (1409), 14-2, 14-3, 14-4, 14-5, 14-6 (1409), 98 (1415); Bd. 8 (1455-1484), bearb. v. Thommen, Rudolf (Basel 1901), Nrr. 161 (1461), 347(1469).
- (27) なお先の報告ではとりあげなかった都市文書集として『ブラウンシュヴァイク市文書集』所収の通告状文書を参考までにあげておきたい。Urkundenbuch der Stadt Braunschweig, bearb. v. Dolle, Josef, Bd. 5 (1351-1360) (Hannover

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

- 1994), Nrr. 503 (1360), 506 (1360) ; Bd. 6 (1361-1374) (Hannover 1998), Nrr. 332 (1366), 608 ([1371]), 614 ([1371]), 626 ([1371]), 628 (1371), 684 (1372), 687 ([1372]), 721 (1372) ; Bd. 7 (1375-1387) (Hannover 2003), Nrr. 848 (1385), 1169 (1387); Bd. 8-1 (1388-1400) (Hannover 2008), Nrr. 49(1388), 50([1388]), 59([1388]), 62 (1388).
- (28) Urkundenbuch der Stadt Hildesheim (=UH), hg. v. Doebner, Richard, Hildesheim Bd. 2 (1347-1400) (Hildesheim 1886), Nrr. 526 (1383), 1021(1398), 1179([c.1380-1400]), 1206([c.1380-1400]), 1220 ([c.1400]), 1221 ([c.1400]), 1222 ([c.1400]); Bd. 3 (1401-1427) (Hildesheim 1887), Nrr. 958 ([c.1400-1420]); Bd. 7 (1451-1480) (Hildesheim 1899), Nrr. 67 ([1451]), 264 (1457), 429 (1457), 433 ([1462]), 541 (1465), 769 (1473) ; Bd. 8 (1481-1597) (Hildesheim 1901), Nr. 93 ([1485]).
- (29) 前注 (28)のうちUH Bd. 2 Nr. 1220 ([c.1400]) および UH Bd. 7 Nr.67 ([1451]) である。
- (30) フェーデ通告者リストを刊本文書として大量に収めるのは Die Urkunden und Akten der oberdeutschen Städtebünde, Bd. 3 (Oberdeutsche und schweizerische Städte-und Landfriedensbündnisse von 1381 bis 1389), bearb. v. Ruser, Konrad, Göttingen 2005であり、ごく一例に Nrr. 1206～1208 ([1388]), 1297～1300 ([1388/89])など。
- (31) Urkundenbuch der Stadt Goslar und der in und bei Goslar belegenen geistlichen Stiftungen, Bd. 5 (1366-1400), bearb. v. Bode, Georg/Hölscher, U., Berlin 1922, Nr. 725([1388]) (〈名誉保持告知状〉)、Nr. 726 ([1388]) (フェーデ通告状)。
- (31a) Zeitschrift des Harz-Vereins für Geschichte und Alterthumskunde, 2. Jg., 1869, 4. Heft, Vermischtes : p. 184-185 (〈名誉保持告知状〉[1465 Sept.16]), 182-183 (フェーデ通告状 [1465 Sept.16]).
- (32) UH (前注28) Bd. 8 (1481-1597), Nr. 93([1485 Ende Febr.]).
- (32a) Ruser [30] Nrr. 2136 ([1388] : ヴェンツェル王がバイエルン大公へ), 2176 (1388 : 同). なお、ゴスラル、ハルバーシュタット、ハノーファーなどザクセ

- ンの諸都市が、ハンザ都市のために、ときのデンマーク、スウェーデン、ノルウエーの王エーリッヒにフェーデを通告した事例が知られる (1427 März 24. und 26.)。Urkundenbuch zur Geschichte der Herzöge von Braunschweig und Lüneburg und ihrer Lande, hg. v. Sudendorf, H., 9, Hannover 1877, p. 9 Nr. 6.
- (33) Cf. Lentze, H., Eine bäuerliche Fehdeansage aus dem 15. Jahrhundert, in : Der Schlem 25, 1951, 127-129.
- (33a) Ruser [30] Nr. 2420 (1388[レーゲンスブルク市の傭兵・市民が、宮中伯ループレヒト (若) に宛てる]).
- (34) Tewes, Udo, Zum Fehdewesen zwischen Weser und Elbe Fehde—Sühne—Urfehde, in : Lüneburger Blätter, 21/22, 1970/71, 121-197, bes. 159 (Anm.141) - 163 (Anm.170).
- (35) Quellen zur deutschen Verfassungs-, Wirtschafts- und Sozialgeschichte bis 1250, ausgewählt und übersetzt v. Weinrich, Lorenz, Darmstadt 1977, p. 312 (17).
なお、本平和令を含め12世紀の平和令すなわち〈法〉とフェーデの問題については次を参照。Wadle, Elmar, Zur Delegitimierung der Fehde durch die mittelalterliche Friedensbewegung, in: ders., Landfrieden, Strafe, Recht. Zwölf Studien zum Mittelalter, Berlin 2001, 103-122.
- (36) Weinrich [35] p. 468 (6).
- (37) Weinrich [35] p. 366 (XVII). Cf. Zeumer, Karl, Die Goldene Bulle Kaiser Karls IV., 1. Teil : Entstehung und Bedeutung der Goldenen Bulle, Weimar 1908, 72 (Kapitel XIX).
- (38) 拙稿「ラントツヴィンガー (Landzwinger) とはなにか——ドイツ刑事法史の一断面——」『熊本法学』122 (2011) 53頁 (注81) 以下参照。
- (39) Urkunden, Briefe und Actenstücke zur Geschichte Maximilians I. und seiner Zeit, hg. v. Chmel, Joseph, Stuttgart 1845, Nr. 177 (24. Febr. 1499); cf. Brunner [47] 5. Aufl., 76 Anm. 4.
- (40) この点で、騎士たちの、フランクフルト・フェーデにおける〈和解契約〉をめぐる次の研究が貴重である。Crößmann, Klaus, Sühneverträge der Stadt

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

Frankfurt am Main mit ihren Fehdegegnern. Untersucht und dargestellt anhand von Urkunden des 14. und 15. Jahrhunderts aus dem Frankfurter Stadtarchiv, Diss. Frankfurt 1964. 卷末には22点の関係文書が刊行されていて、われわれの今後のフェーデ研究にいろいろの点で有益となろう。

- (41) Cf. Maass, Max Peter, Halsgericht. Kriminalität und Strafrecht in alter Zeit. Mit 84 Abbildungen, Darmstadt 1968, 100-123 ([Die Kriminalität der „Fehde“]).
- (42) Rösener, Werner, Fehdebrief und Fehdewesen, in : Kommunikationspraxis und Korrespondenzwesen im Mittelalter und in der Renaissance, hg. v. Heinz-Dieter Heimann/Ivan Hlášek, Paderborn/München/Wien/Zürich 1998, 91-101.
- (43) Klocke, Friedrich von, Beiträge zur Geschichte von Faustrecht und Fehdewesen in Westfalen, in : Westfälische Zeitschrift 94, 1938, p. 40 (1394 Mai 8), p. 40 (vor 1394 Juni 12), p. 40 (Ohne Datum [vor 1394 Juni 12]), p.45 (1409), p. 46 (1410), p. 48 (um 1414), p. 48 (1414 Dez. 21).
- (44) Orth, Elsbet, Die Fehden der Reichsstadt Frankfurt am Main im Spätmittelalter, Wiesbaden 1973, p. 35 (1404).
- (45) 押川剛 『「子供を殺してください」という親たち』 (新潮文庫・2015) 131頁。
- (46) Garnier, Claudia, Symbole der Konfliktführung im 14. Jahrhundert : die Dortmunder Fehde von 1388/89, in : Westfälische Zeitschrift, 151/152. Bd., 2002, 23-46 bes. 24 (Anm.10) f.
- (47) Brunner, Otto, Land und Herrschaft. Grundfragen der territorialen Verfassungsgeschichte Südostdeutschlands im Mittelalter, Baden bei Wien 1939, 91-95 (5. Aufl., Wien 1965, 73-77). またイタリア語版 (Terrae potere. structure pre-statali et pre-moderne nella storia costituzionale dell' Austria medievale, introduzione di Pierangelo Schiera, 1983, 102-107)・英語版 (*Land and lordship: Structures of Governance in Medieval Austria. Translation and Introduction by Howard Kaminsky and James Van Horn Melton, University of Pennsylvania Press, 1992, 63-67*) 参照。
- (48) Asmus, Herbert, Rechtsprobleme des mittelalterlichen Fehdewesens dargestellt an

- Hand süd hannoverscher Quellen vornehmlich des Archivs der Stadt Göttingen, Diss. Göttingen 1951, 40 (Anm.1) - 45 (Anm.2).
- (49) Vogel, Thomas, Fehderecht und Fehdepraxis im Spätmittelalter am Beispiel der Reichsstadt Nürnberg (1404-1438), Frankfurt (Main) u.a., 1998, 181 (Anm.537) - 192 (Anm.574).
- (50) Reinle [14] 252 (Anm.141) -255 (Anm.158).
- (51) Tewes [34] 153 (Anm.79) -157 (Anm.121); Orth [44] 35 (Anm.54) -50 (Anm.146); Terharn [22] 42 (Anm.173) -58 (Anm.265) など参照。
- (52) 山内進『掠奪の法観念史 中・近世ヨーロッパの人・戦争・法』(東京大学出版会・1993) 240頁。
- (53) 山内進 [52] 238頁。
- (54) Cf. UH Bd.7 Nr.264 (1457) : 〈darumme dat he van unser vrundtinnen weghe Alheyt Koken der stad to Halverstad openbar vyent gheworden is (彼は、都市ハルバーシュタットにとって…公然たる敵となった)〉
- (55) もちろん、長文の通告状もある。例えば、ヒルデスハイムについていえば UH Bd.7 Nr.264 (1457 [厳密には〈告知状〉である]), UH Bd.8 Nr.93 ([1485]). なお16世紀になると、通告状の文章は長くなる。ハンス・トーマス・アープスベルクのもの (Ritzmann [8] Anhang : Quellenstücke p.4 [17. Juni 1520]) はそれほどではないが、ハンス・コールハーゼの通告状はずいぶん長文 (Müller-Fragin [9] 33-34) となる。一種の〈弁明書〉の体裁をとっている。
- (56) Liv-, Est-und Curländisches Urkundenbuch nebst Regesten, hg. v. Bunge, Friedrich Georg von, Abt. 1, Bd. 5, Riga 1867, p. 415 Nr. 2266 (1418).
- (57) His, Rudolf, Das Strafrecht der Friesen im Mittelalter, Leipzig 1901, p. 364 Beilagen Nr. 3 (um 1482).
- (58) Urkundenbuch für Geschichte des gräflichen und freiherrlichen Hauses der Vögte von Hunolstein, hg. v. Toepfer, Friedrich, Bd. 2, Nürnberg 1867, Nrr. 178 (1420), 183 (同) , 205 (1426), 209 (同 [フランス語文] , 210 (同) , 211 (1427), 212(1426), 213 (同) など。

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(1)

- (59) Stöber, August, Drei Absagebriefe, in : Zeitschrift für deutsche Kulturgeschichte, 3, 1895, p.796-800, Nrr. 1 (1466), 2 (1467), 3(1467).
- (60) Ruser [30] Nrr. 3085 (1386), 3089 (1386).
- (61) Mell, Richard, Abhandlungen zur Geschichte der Landstände im Erzbistume Salzburg, in : Mitteilungen der Gesellschaft für Salzburger Landeskunde, 44, 1904 Anhang : p. 177-178 Nr. 11 (1374); p. 178-179 Nr. 12 (1374); p. 179 Nr.13 (1374); p. 225 Nr.43 (1424); p.226 Nr.44 (1425); p.230 Nr.48 (1426).
- (62) Kollar, A. F., Analecta Monumentorum Omnis aevi Vindobonensia, 2, Wien 1792, Sp.878-887 (Nr.20 : 1441), 892-893 (Nr.24 : 1441); Schlager, J. E., Wiener-Skizzen aus dem Mittelalter, N. F. 3, Wien 1846, p. 98 Nr. f. : 1417 Jan. 27.
- (63) 吉村昭『仮釈放』（新潮文庫・2004）204頁。
- (64) 『儀礼の象徴性』（岩波現代文庫・2006）12頁。
- (65) Garnier [46] 24 (Anm.10). なお、文書による通告以前の時代における通告形態につき Kaufmann, E., Widersagung, in : HRG V (1991-1997), Sp. 1350 f.
- (66) この点については、通行状送達の絵図が参考になろう。折りたたまれ（折りたたまれた上に印章が捺されることがある）、長い、あるいは短い棒の先に差し込まれた通告状がくっきりと描かれており、〈文書〉そのものが通告や通告状送達の行為を象徴しているかのようで、印象的である（拙稿 [17] 14頁 [注81, 82]）。前掲の図版を参照。
- (67) UH Bd.7 Nrr.264 (1457), 388([1460]), 570 ([1466]). 通告状の名称一般については His, Rudolf, Das Strafrecht des deutschen Mittelalters, 1, Weimar 1920, 17 (Anm.7).
- (68) UH Bd.2 Nr.1206 ([c.1380-1400]).
- (69) Urkundenbuch der Stadt Quedlinburg, bearb. v. Janicke, Karl, Bd. 1, Halle 1873, Nr. 181 (1366 Sept. 30).
- (70) UH Bd.7 p. 673 (Tilen Rimanne vor gant mit den vorwarigen to Czarstede 8. d. [1471] : これは、書状を携えフェーデ通告に赴く使者のための報酬の件を

資 料

述べるもの) . cf. Tewes [34] 160 Anm.147.

(71) Urkundenbuch der Stadt Wernigerode bis zum Jahe 1460, bearb. v. Jacobs, Eduard, Halle 1891, Nr. 427 (1439 Jul. 21).

(72) UH Bd.2 Nr.1123 ([c.1399]).